

# 神様と世界 ②

FilJap 小学生部

# \* 目次 \*

- 神様に似た世界
- 授け受けする世界
  - ① 授け受けする作用
  - ② 先に与える生活



## ■ 神様に似た世界

私たちが絵を描くときには、どうすればいいでしょう？まず、絵を描くための材料を準備しなければなりません。その次には、心の中で自分が描きたいものを思い浮かべます。そして計画を立て、材料を使って、それを線と色、形に表して画用紙の上に描きます。ですから絵は、画家の頭の中で考えたものを見えるように表したものです。見えるものは、見えない考えをそのまま真似て出てくるのです。

同じように神様も、まず心の中で考えて、計画を立て、材料を使って万物をつくられたと考えられます。私たちが住んでいる宇宙は、見えない神様の心が、考えるままに現れて見えた世界だということができます。ですからこの世界は、自然に生まれた世界ではなく、つくられた世界だといえます。つくられた世界のなかには、神様の心と体が入っています。このような点から、神様が作られた



世界は、次のような特徴をもっています。

第一に、すべてのものは心と体から成り立っています。言いかえると、二つが合わさってつくられたものです。心は私たち人間だけにあると思われがちですが、動物にもあります。草や木にも心のようなものがあります。私たちが家で飼っている犬は、可愛がるとしっぽをふります。しかし、関心をもたれないと元気がなくなります。これは、動物にも心があるということです。植物も心のような部分があって、それが、人間における心のような作用をします。ですから、草や木は生き物として生長し、その働きを保つようになるのです。



私たちの体が大切なように、心も大切です。それは、世界のすべてのものも同じです。私たちが、道端の石ころ一つ一つ、草一本一本にも愛の心を見せると、それらの姿もまた愛らしくなります。それはすなわち神様の心と体に似せて造られた世界であり、神様の姿をそこに感じるからです。神様は、ご自分に似せてつくられた世界のすべてのもののの中に宿っておられて、ただの一つの例外もありません。私たちの世界はそのように、神様に似ています。

第二に、世界のすべてのものは、かたちとして現れる姿も、また二つから成り立っています。人間は男と女に別れ、動物は雄と雌に分かれ、植物もおしべとめしべで繁殖します。聖書の創世記を見てみると、「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された」と記録されています。私たちは今まで、神様のことを「天のお父様」と呼んできましたが、神様は父親であられるだけでなく母親でもあられます。ですから、「天の父母様」と呼ぶのが正確で正しい表現です。天の父母様であられるので、ご自身の姿のとおり人間を男性と女性につくられたのです。

創世記2章を見ると、神様はアダムが1人でいる姿を良く思われず、アダムのあばら骨から女性であるエバをつくられたとあります。これは、本来、男と女がペアとなって、たがいに助け合いながら生きていくようになっていることを意味します。

物質のあり方や、自然で起きていることがらもそうです。例えば、暑さと寒さ、太陽と月、夏と冬などは、この世界のすべてのものが、二つのたがいに異なる姿をもっていることを示しています。しかし、





この二つの異なる姿は、たがいにくみ合うのではなく、補い合い、助け合い、大切にしています。これはまさに、世界をつくられた神様の心と体がそのような姿だからです。私たちが住んでいる世界は神様に似た世界です。



## ■授け受けする世界

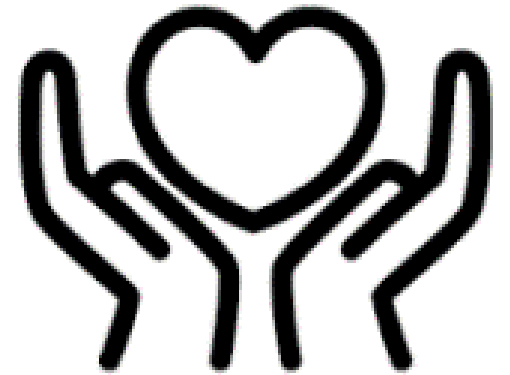
### ①授け受けする作用

世界のすべてのものをくわしく見てみると、それらは自分一人では生きられないということが分かります。男と女は、愛で一つになってこそ、子供を生むことができます。たがい愛を授け受けすることで、生きられるのです。私たちが息をするとき、空気を吸うだけで、はかなければ生きることができません。その反対の場合も同じです。すべての生命は、どちらか一つだけにかたよると、生きることができません。神様が、そのようにつくられたからです。

授け受けすることは、永遠に変わることはない神様の力から出てきます。神様は、どちらか片方の味方ではありません。すべてのものに平等に愛をくださり、たがい助け合わなければ生きていけないようにつくられました。これがまさに、神様の永遠の力の本来の姿です。

夫と妻、親と子供、兄弟がたがいに助け合えば、家庭が幸せになります。しかし夫と妻、親と子供、兄弟の間に愛と信頼を授け受けできないと、その家庭は争って不幸になってしまいます。社会や国家や世界もまた同じです。たがいに授け受けできなければ、不幸になってしまいます。神様の永遠な力からぬけだして、自分だけよく生きようとする、おろかな心をもつようになると、そのようになります。

授け受けすることは、私たちの間だけですることではありません。私たちは、私たちをつくられた神様とも、授け受けすることができます。神様が私たちをつくって愛してくださるように、私たちもまた、神様を信じて、神様の愛にこたえることが重要です。私たちも、神様に愛する心をささげなくてはならず、実さいに行動することができなくてはなりません。そのためには、どのようにすればよいでしょうか。



教会に行って、一生けんめいにお祈りすることも重要ですが、まず近くにいる人を愛することが必要です。神様は、私たちみんなとともにいらっしゃるからです。近くの人を愛することが神様を愛する道です。

神様は永遠に変わりません。ただ、私たちが変わりやすいのです。私たちは、神様を知らないと言ったり、神様を無視したりすることがあります。世界の多くの問題は、そのために起こります。つまり、私たちと神様の間の正しい授け受けの関係が切れてしまったためです。神様と授け受けする関係は、私たち人と人の間で授け受けすることと同じように重要なのです。

## ■ 先に与える生活

授け受けする生活は、与えるときにもうれしく、もらうときにもうれしいです。好きな友だちにプレゼントをあげてもうれしいし、友だちからもらってもうれしいです。お父さんとお母さんから愛を受けてうれしいし、お父さんとお母さんを手伝ってあげるのもうれしいです。

しかし、私たちはよく、人にあげることは損だと思います。それはまちがった考えです。人を愛する心がないからです。

親は、おいしくて良いくだものを子供たちに与え、おいしくなくて見ばえの悪いくだものを食べます。親は、おいしくなくて見ばえの悪いくだものが好きなのでしょうか。ちがいます。





私たちを愛しているので、私たちがおいしそうに食べる姿を見て、喜ばれるのです。いとしい子供たちだから、限りなく与えようとされるのです。与えて、さらに与えても足りないと考えるのです。ですから、人に与えることをおしむのは、愛が足りないからです。



イエス様は、「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ」と言われました。多くの人に愛を与えた人は、多くの人から愛を受けます。多くの人にほどこした人は、多くの人からつくされ、多くの人を助けた人は、多くの人から助けられます。

韓国のことわざに、「話しかける言葉が優しくければ、返る言葉も優しくなる（日本では『魚心(うおごころ)あれば水心(みずごころ)』という言葉があります。私が他人によくしてあげると、他人も私に良くしてくれるという意味です。

私たちが他人に良くしてあげるときには、何かを願う心があって、そうする場合が多いです。親のお手伝いをするとき、おこづかいをもらうことを考えながら、お手伝いをするという場合がそうです。それは、もちろん悪いことではありません。しかし、より良いのは、相手に願う心をもたずに、自分がまず与えることです。

私たちは、なぜお父さんとお母さんを尊敬するのでしょうか？それは私たちのために限りなく与えて下さるからです。世界の多くの人々が、イエス様を尊敬します。その理由は、イエス様が私たちを救うために、様々な苦しみを受け、ご自身の命までも捨てられたからです。イエス様は、先に与える方でした。

他人をにくみ、ために生きない人は、他人からも尊敬されません。与える喜びが多い人は、心がゆたかな人になり、もらう喜びに生きる人は、心が貧しい人になります。

ですから、財物を多くもった人よりも、より多く与えようとする心であふれた人が、本当の富める人になるのです。本当の富める人は、神様の永遠な力を、自分の中にいっぱいにつめた人です。



～終わり～

引用文献：  
『はじめての  
原理のおはなし』